

水棲昆蟲記

——みつすましの蘭造り——

東京女子高等師範學校教授

久 米 又 三

マリさんが未だ吾々の研究室に居る頃の事です。マリさんは水に棲む昆蟲が此の上もなく好きな様でした。私もごちらかミ云へば、陸に棲む者よりも其の方が好きです。陸に棲む蟲を眺めて居るミ、時折り空恐ろしくなるミがあります。彼等が持つて居る智慧が、蟲にしては餘りに優れて居るミ感ぜられるミがあるからです。生きるには絶好な條件を與へられて居る半面に、烈しい生存競争を乗切るには、其の様な智慧が必要になつたのでせう。けれども小さい身體の中に包まれて居る小さい腦髓の中で、さうしてあの様な智慧が廻り切れるかと思ふミ、いくら生存競争の結果ミは云へ、餘りにも早熟に過ぎるのではないかミ考へさせられます。陸の昆蟲共は、好きになれるには餘りに生活が現實すぎて、時には彼等の智慧が吾々の意表に出て、吾々の生活をすら脅して居るのではないかミ疑はれるミがあります。

それに比べると、水に棲む昆蟲にはそれ程の智慧者はなささうです。元來水は昆蟲の棲む場所ではありません。空氣を呼吸する昆蟲が、棲み場を水に求めるミ云ふ事は、何かよく／＼の事情がなくてはなりません。ですから進化論者は彼等を指して、生存競争の逃避者だミ云ひます。時には劣敗者だミも罵ります。小さい身體で、身分不相應な烈しい競争裡に摩擦されて、過ぎた智慧者ミなるを良しミするか、逃避して一先づ雲烟を過眼視するを良しミするかは決定に困難な問題でせう。然し逃避した生活には、半面には不便が伴つて居る代りに、他の半面には生活の餘裕がありさうです。水棲昆蟲

が水の中に逃避して、先づ第一に呼吸問題で無理をして居ます。元來空氣呼吸のために考案された昆蟲の呼吸器(氣管)が、水に入つたから云つて直ぐに魚の鰓の様に水中から酸素を取る譯にはゆきません。ですから「げんごろう」でも「がむし」でも水中へ潜る時には、潜水夫の様に空氣を携帶してゆきます。携帶空氣が悪くなるを、嫌でも水面へ昇つて來なくてはなりません。此の様な生活は随分窮屈で、餘り天下晴れての生活とは思はれません。其の代りに、彼等の棲み場は廣々として居ます。敵も少ない様ですから割合に安樂でせう。吾々が水棲昆蟲が好きだ云ふのは、然し決して此の逃避生活を羨むがために云つて居る譯ではありません。少なくともマリさんはその様な質の人ではありませんでした。

二

五月も過ぎて六月にもなるを、廣々した水の中の生活がいさゝか戀しくなつて來ます。二匹三匹せつかに遊いで居た「みづすまし」が、段々數を殖して來ます。長い冬の眠りから覺めた彼等も、今を生活の最盛期と心得て居るのでせう。研究室のマリさんも愈々急がしくなつて來ました。マリさんは水棲昆蟲に就ての話を澤山持つて居ますから、私もマリさんの研究室へ入つて、其の話を聞いて、蟲共の生活に眼をやる事が日課となつて來ました。ところがマリさんの話の中には、いつも「みづすまし」の話が抜けて居ます。私も「みづすまし」の生立ちに就ては、要領を得ない事が多いのです。實際マイアル水棲昆蟲誌を開いて見ても、あのせつかな蟲の生立ち記に就ては、ものゝ半頁も書いてはありません。「みづすまし」は、其の生立ちの途中で、巧に姿を消すので、餘り人の眼には觸れないのだと書いてあります。いくら「みづすまし」がせつがちでも、甲蟲には違ひないので、卵から幼蟲になり、蛹になつてから、「すいすいすい」みづのうへ、およいでわをかくと繪本に書いてある、あの「みづすまし」になるに違ひありません。途中で姿を消す云ふのは恐らく幼蟲から蛹になる時のこととせう。さう思ふに、「みづすまし」の蛹などは一體どこに居るのか見當もつきません。

マリさんもこれには當惑して居るらしいのです。そこで急に「みつすまし」探究云ふ事に話が決まりました。

三

「みつすまし」には、單に「みつすまし」ミと呼ばれて居るのミ、其よりは形が稍々大きくて「おほみつすまし」ミ名付けられて居るのミがあります。兩方共、五月中旬頃から盛に卵を産み始めまして、これが夏迄続く様です。卵は白くて、小さくて、長さが二耗位の橢圓體です。池等に浮かんで居る水草の表面に、「みつすまし」の方は稍々不規則に、「おほみつすまし」の方は縦に一列に産付けて居ます。さうも夜中に産むものミ見えて、産んで居る所を見ミつけた事がありません。此の卵は早くで一週間位で、中から幼蟲が孵化して出て來ます。産れ出た幼蟲は四耗位の長さで、親ミは似ても似つかない恰好をして居ます。體は長くて節があり、色は親の様に黒くなく、全體が淡黄色で、美しい赤褐色や紫色の模様があります。感じは半透明です。不思議にも幼蟲は水の中で呼吸の出來る鰓を持つて居て、それが腹部の兩側にふさ／＼ミ羽の様に生えて居ます。親が呼吸問題で苦勞をして居るのに、子供はちゃんミ此の問題を解決して居る所を見るミ、移民の親子を見る様です。

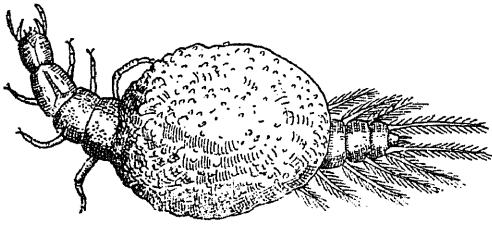
孵化したての幼蟲でも明瞭に判りますが、「みつすまし」ミ「おほみつすまし」の幼蟲ミではだん／＼大きくなるにつれて相違が益々明瞭になつて來ます。「おほみつすまし」の方では長い割に細く、「みつすまし」では短い割に太いのです。愈々老熟したミ思はれるもので、「おほみつすまし」の幼蟲は長さが二糶、幅が二耗位、「みつすまし」では長さが一糶少しで、幅が二耗半程もあります。水の中で、波の様に體をのた打たせて遊び廻る所は、親程にせつかな感じは與へませんが、餘り可愛いものではありません。幼蟲供は何を食べてるものか判つきりしませんが、「いミみゝず」を與へて置いたら大きくなりました。水の中に居る小さい動物が好きなのでせう。

幼蟲が大きくなるにつれて、愈々姿を晦される時が近づいて來た譯です。マリさんも私もいさゝか緊張して警戒陣を張つた譯です。一體彼等は何をしでかすのか豫想が付きません。

ところが六月中旬頃、頂度産れ出て三週間位の幼蟲が、しきりに體をのた打たせて水から這ひ上つて來ます。確に「みづすまし」の方の幼蟲に違ひありません。私共は愈々彼等の逃晦期が來たにばかり、蟲の行動を注視して居ますが、別に

逃晦者さと思へない様な落著きで、蟲は悠々土の上へ上つて來ました。やがて口で前肢で、しきりに泥をさぐつて居るかと思つて居る内に、小さな泥の塊を喰へ、ぐつみ身體を反らしたと見る間に、泥を脊中へ載せます。何の意味だか少しも判りません。見たる間に何度も何度もこんな事を繰り返して居る内に、背中の泥はだん／＼大きくなつて、直徑が半握もある塊になりました。泥を背負つた姿は柴を茹つて歸る人の様です。

私達は、此の蟲はてつきり此の泥の塊の中に姿を消すものと判斷しましたが、驚いた事には、蟲は泥を背中に背負つたまゝ又もや靜かに這ひ出します。一體どこで姿を晦すのか氣が氣でなりません。蟲は靜かに這つて草へのぼり始めました。葉の蔭あたりを連りに物色して居る様子です。頂度此の時、私は他の用のために現場を去らなくてはなりませんでしたが、一人残つたマリさんは、必度「みづすまし」に姿を晦されてしまうのではないかと思ふと残念でなりませんでした。



泥を背につけて這う「みづすまし」の幼蟲

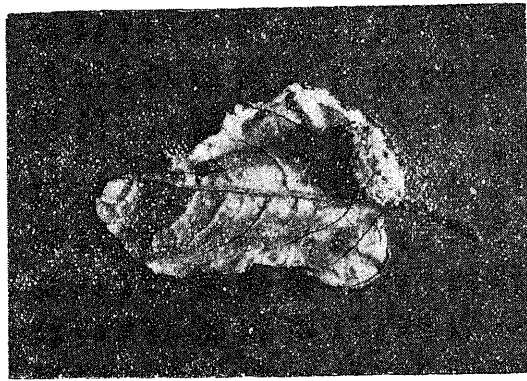
次の日、出来るだけ早く昨日の現場をのぞいて見ました。不思議な事に、乾いた泥の塊が葉蔭に著いた儘になつて居ま

す。蟲の姿は見當りませんが、どうも此の泥の中に入つて居る様子です。マリさんは、蟲が繭を造つて、中へ入つたを報告するのですが、私には解せません。マリさんは其の後の経過がどうなつたか想像しろと云ひます。いくつかの可能な方法を想像して、「みづすまし」の智慧を凌ぐ事に努めて見ましたが、私の解答は全部通過しませんでした。マリさんは一應私に経過を話してくれましたが、頂度他の一匹が前日の様な事を始めたので、其の様子を必ず見て行けと云ひます。なる程マリさんの説明の通りです。葉蔭に這ひ上つた蟲は、一寸停止しますと、やがて急に體を蛇動させて、背中の泥から抜けて前の方へ出て來ます。泥の塊は葉に附著した儘になつて居ます。今まで背中に著いて居たのに、さうしてそんなに體から離れるのか判りません。抜け出した蟲は再び泥の方へ歸つて來ました。そして頂上あたりを目ざして穴を開け始めます。その穴から頭を押し込んで、體を螺旋狀に巻きながら、くるつくるつミ泥の中へ潜つてゆきます。殆ど體が見えなくなつた頃に、穴の所へ頭が出て來ました。穴の縁をしきりに口でつついて居るかと思ふ内に、穴が段々塞つて來ます。やがて穴が塞つて、蟲の體が全く泥の中へかくれて了ふと、吾々は急に蟲に逃げられた様な氣がし始めました。暫らくの間泥の中でもぐぐ動くのが見えます。その度に泥の塊は繭の形らしくなりました。蟲が水の中から上つて來てから、かれこれ二三時間も経つたでせう。泥の中へ入つた蟲はだんぐ動かなくなりました。泥の表も幾分滑かになつた様です。これで前の日に造つたミ云ふ泥の繭もそつくりな物が出來上りましたが、吾々は泥の壁をそつミ破つて、中が見たくて堪へません。

五

「みづすまし」の幼蟲で興奮して居る間に、こんどは「おほみづすまし」の幼蟲が又同じ様に土の上へ上つて來ました。「みづすまし」も同じ手で人を驚かすことだらうとたかをくくつて居るミ、何んだか様子が少し變です。のた打つて上つて來た

幼蟲は、別に泥を取るでもなくすんぐミ草の方へ這つて行きます。そんなことをしたら、「みづすまし」の様な繭が造れないぢやないかミ教へてやりたい様な氣になつて居るミ、蟲は悠々ミ莖を上つてゆきます。そして地面にすれ／＼になつ



繭泥の「しすづみほお」

て居る葉の裏へ廻りました。ひつミしたら、水溫が高くなりすぎたために水から逃げだしたのではないかミ心配して居ますミ、蟲は急に胸の當りを葉から垂れ下げて、頂度下にある泥をつまみ出しました。泥の小塊をつまむ度に、それを體の兩側へ積み上げて行きます。泥は頂度火藥庫の周りにある土手の様な形になつて葉の裏にくつついて居ます。泥がしきりに運ばれるミ、土手はだん／＼高くなりました。土手の形は橢圓形で、長さが一握餘、幅が一握足らずあります。土手の高さが三耗程になつたら、蟲は泥を取る事を止めて了ひました。そしてこんきは泥の圍ひの中で、頻りに泥の頂きをつまんで居ます。だん／＼堤が高くなつて、天井が出来さうになりました。時々圍の外へ出て来る事もあります。天井へひつつける泥を底の方から持つて來たり、天井の縁を伸して見たりする内に、蟲の體は泥の中へだん／＼かくされ、天井の縁を伸して見たりする内に、蟲の體は泥の中へだん／＼かくされて來ました。斯の程度になるミ、前の「みづすまし」の造つた土繭ミ何等變りがありません。「みづすまし」に教へられた巧妙な技術を、「おほみづすまし」に教へ返へさうとした吾々は、又々「おほみづすまし」に虚をつかれた形です。

六

「みづすまし」にしても「おほみづすまし」にしても、今造つて入つた泥の塊は繭に違ひありません。切角繭ミ云ふ大切な

器官を與へられて、本當の水棲生活に入つた此等の幼蟲が、成長して親となるためには、此の大切な鰓器官を捨て、再び空氣呼吸へ還らねばなりません。考へて見るにさけない事です。新しい環境に入つて、新しい環境に適應するのは子供ばかりです。然し其の子供の中にも、將來成長するにつれて、新しい環境に反逆する素質が入つて居るかと思ふに尙更なさけなさが増して來ます。

幾つか造られた繭の中を、吾々は先刻から覗いて見たかつたのでした。土繭の中の幼蟲は一體何をして居るのでせう。幾つか開いて見た中には、未だ幼蟲の姿で寢て居たのもありましたが、幾つかの中には美しい卵色をした蛹が見つかりました。大體繭に入つて三日目には蛹になるらしいのです。じつとして空氣呼吸をする蛹が、こんな泥の繭の中に入つて、葉蔭の目立たぬ所に置れることは、よく考へたものです。

吾々は土繭の中で、兎に角美しい臘細工の様な蛹を見とける事が出來て、ほつと一呼吸^{イキ}入れる事が出來ました。水棲昆蟲の生活は逃避者の生活だ等と思ひ込んで、「みづすまし」を軽く扱つたのが最初からの不覺でした。彼等も矢張り相應の智慧を持つて、相應な戦をして居ると思えます。

後記——蛹は一週間程して成蟲になります。成蟲は土繭を破つて出て來るに直ぐに水の方へ向つて歩いて行つて、普通に見る「みづすまし」の様に遊び廻ります。(二三・五・二五)